

クラゲンフルト大学言語学科

Universität Klagenfurt, Institut für Sprachwissenschaft
University of Klagenfurt, Institut of Linguistic
Universitätsstraße 65-67 A-9020 Klagenfurt, AUSTRIA
TEL:0043-(0)463-2700 350 FAX:0043-(0)463-2700 351

鈴木 伸一

クラゲンフルト大学は1970年に開校された、オーストリアで一番新しい大学で、言語学以外に授業及び大学教授法・学校教育及び社会教育学・心理学・授業技術及びメディア教育学・経営学・情報科学・ドイツ学・英米文学・スラブ学（主にロシア文学）・ロマンス学（フランス文学・イタリア文学等）・比較文学・哲学・社会学・地理学・歴史学・数学・法学の各専攻がある他、付属施設としてEDVセンター等が設けられており、約4000人が学んでいる。近年は経営学と情報科学に人気が集中していることや、昨今の大学改革にともなって、1993年に旧来のクラゲンフルト教育大学から現在の名称になった。日本関連の授業は、言語学科の日本語コースの他にも、社会学、地理学、経営学等で度々行われているが、アジア事情の一環としてなされる場合が多い。文化学部言語学科では、これまでも主として非印欧語の語学コースを開講しており、現在、トルコ語・アラビア語・ハンガリー語が常設されているが、日本語もその一つとして、1993年3月より開講されている（なお、95/96年の冬学期は講師の都合で休講となる）。

日本語学習者の内訳

93年のコース開講前に説明会を開き、そこで「専攻」「コースに対する希望」等を書かせたが、その時点では約30人中20人以上が経営学を学んでおり、それに従って「希望」も「会話中心で」「日本事情をいれて」といったものが自立した。その様な学生側の希望をいれて、当初は15分程度の日本紹介ビデオをその都度見せる予定でいたが、言語学科の要望により、結局、語学中心の授業として進めることになった。

1学期目は、イースター休暇までの1カ月ほどは、コース参加者は常時25人を越え、延べ30人ほどが受講していた。ただ、2週間のイースター休暇後は激減して、最終的に7人ほどが残った。その内、2人が大学を変ったり留学したりしたため、2学期目は5人程度でスタート。それがクリスマス休暇まで続いたが、休み明けにはやはり人数が減り、学期末には3人ほどとなった。先学期は、大体この3人（言語学助教授1人、言語学博士課程1人、経営学1人）と、外部からの聴講1人（音楽教師）で授業を行った。

カリキュラム

コース開講以来、週1コマ（2時間）×15回で、1学期30時間の授業となっている。ただし、先学期は講師の都合により、約2カ月間で集中講義を行ったため、1コマ3時間の授業となった。学期毎の到達目標は、講師の裁量にかかっており、学期初めにある言語学科の説明会で提示することになっているが、以下に述べるように、かなりゆっくりとしたスピードで進め

ている。

<1学期目>

名詞文（年月日、時間を含む）、動詞文（動作・行動・往来・存在）、形容詞文まで。

〔表記〕学期の終わりまでに、平仮名全部と片仮名で自分の名前、住所、出身等が書けること。

<2学期目>

形容詞文（比較・最上級、一は一が一。）受給、動作の目的、て型の導入（基本的用法、依頼）、勧誘、助数詞（一部）。

〔表記〕片仮名の残り全部

<3学期目>

助数詞、て型+います、ない型の導入、願望・依頼・許可・禁止・義務etc.

〔表記〕漢字約50字

使用教材

1週間1単元の割合でテキストを作成し、時間ごとに配布している。上記のように時間数が1学期で30時間しかない中、コンパクトにまとまったドイツ語によるテキストがないこと等から、ある意味で苦肉の策としてテキストをつくることとなった。テキスト自体は、講師が Volkshochschule（市民大学講座）で教えていた際に作成したものを、文法説明や練習問題等について改訂したものである。

テキストの形態としては、初めに新出の文型を提示し（日本語）、それについてドイツ語による文法説明をつけ、最後に新出単語の意味（ドイツ語）と発音（発音記号）及び動詞の活用型（今のところ辞書型・ます型・て型のみ）を提示している。平仮名・片仮名については、最初の授業で発音記号との対応表を渡し、各自自習させるようにしたが、板書する場合には基本的に発音記号も付けるようにしている。ここで、初めから平仮名・片仮名表記のテキストにして発音記号を併記したのは、ローマ字表記にした場合に起こり得る母語の干渉を極力避ける意図があったからだが、それが学習者の負担になったことは否めないうえ、効果についても多少疑問が残った。以下に、参考とした教科書類をあげる。

テキスト

- * 日本語の基礎Ⅰ かんじかなまじり版：財団法人 海外技術者研修協会
基本文型の導入として形式を踏襲。ただし 語彙や練習問題等は大幅に変更・削除している。
- * 日本語集中講座 JAPANISCH INTENSIV I, II :
Detlef Foljanty/Hiroomi Fukuzawa: Helmut Buske Verlag Hamburg
文法事項の説明として、適宜引用。
- * 日本語文法編：ノルトライイン・ヴェストファーレン州立言語研修所 ヤボニクム
文法説明の他、内容的にも多く引用。
- * 日本語教室：Maderdonner 夫妻

初級文法説明用として。

- * An Introduction to Modern Japanese : 水谷 修/信子: The Japan Times

いくつかの会話文を参照。

- * 絵とタスクで学ぶにほんご : 凡人社

練習用として。

- * JAPANESE FOR BUSY PEOPLE I : 講談社インターナショナル

会話練習用ゲームとして、2、3の文例を使用。

- * BUSINESS JAPANESE : 日産自動車

日本事情的な情報として、各課の終わりにある Business Information を配布。

(これは特に経営学専攻の学生対策として)

表記 (漢字)

- * 250 ESSENTIAL KANJI FOR EVERYDAY USE 生活の中の漢字 : 東京大学

視聴覚教材 (ビデオ)

- * ヤンさんと日本の人々

第1課と第8課のみ使用。

- * JAPANESE FOR BUSY PEOPLE I

ビデオはほぼ毎回、その週に学習する単元に対応する課を見せるようにしている。内容はプリントにして配布しているが、ビデオを用いる意図が、出来るだけ様々な日本語に触れさせることにあるため、ここで出てくる単語については、特に覚えさせるようなことはしていない。カセットの方は、試験のヒアリング問題として使用した。

当面の課題

当日本語コースが抱える問題はいろいろとあり、それぞれ相互に関連しあっている面も多いが、今までの経験からいうと、以下のような点があげられるであろう。

- * 新しい大学ということもあり、日本語・日本関係の書籍が全くといっていいほど揃っておらず、自習のための環境が整っていない。ただしこの点については、国際交流基金による95年度の教材援助を受けられたため、多少改善されることと思う。
- * 単位とは直接関係のない選択科目であるため、学習意欲が失われやすく、特に長期休暇後や専攻学科のテスト前になると、脱落率が高くなる。
- * 表記等に費やす時間がないため、学習者の自主性に任ず結果となり、定着したかどうかの確認や修正がテストの際くらいしか出来ない。また、上記との関係で、課題等を出したとしてもやってこない場合が多く、余り意味をなさない。
- * 1講座しかないため、学期が進むにつれて学習者の数が減っていく一方、日本語学習の意欲のある全くの初心者に対応できない。
- * 言語学専攻の学習者に合わせて、文法等で多少専門的な説明をした場合、他の学習者が理解できない。また、それとの関連で、日本語に興味を持っている一番の層である経営学の学生に対して、適切なケアが為され得なかった。

*講師が1人しかいない為、その講師の日本語にのみ慣れてしまう傾向がある。また、地域柄、習得した日本語を学習者が運用してみる場がない。

*事務手続きの関係上、大学当局が代講をたてることに難色を示しており、講師の都合如何で休講、あるいはコース自体がなくなる可能性がある。

当地では、いったん「実績」が出来ればそのまま続くようで、とりあえずは1996年夏学期の枠を確保することができた。しかし、このように問題ばかりが山積みしており、今後、存続しているのか、存続するとしてどのような形になるのか、今のような形で発展性があるのかどうか等、今のところ全くわからないのが現状といえる。